

日米科学協力事業・共同セミナーで自主  
学習の成果をポスター発表

9月26・29日  
ハワイ大学

## アメリカ人の学問に対する熱心さと

### 英語の重要性、学問への好奇心を実感

日本医科大学4年 遠藤 由樹

今年の1月から、3年生のカリキュラムとして位置づけられた自主学習で自分は生理学第一を選んだ。特に何がやりたいとか、この先生の下で学びたいといった決定的な動機は全くなかった。ただ授業で自分の好きそうな分野で、やりやすそうな先生が木山裕子講



好評だったポスター発表と遠藤君  
英語での討論も高い評価を得た

師だったということだけである。

右も左も分からない自分に先生は自分のやれそうな仕事をどんどん与えて下さった。もちろん技術的に劣るので失敗も多い。でも先生はそれをとがめることもなく、チャンスは何回もドさった。最初はそれ程やる気のなかった自分も、失敗するとかやしいもので、次は絶対やってやると次の日もまた次の日も研究室へ足を運ぶようになった。

自分もそうなのだが、先生はとりあえずやってみる、理論はその後からついてくるという考えの人なので、頭を使うのが苦手な僕は、とてもやりやすかった。そうこつしているうちに、一つのステップをクリアし、その次、その次とままと実験のとりこになつてしまった僕は4年生になつても続けることにした。4年になるとカリキュラムに人っていないので、授業以外の時間を使わなくてはいけない。部活もあるので非常に限られた時間で、うまくやりくりしなくてはいけなかった。そんな時にハワイで日米共同セミナーがあるので、そこでポスター発表してみたいかと佐久間康夫教授からお誘いを受けた。その時はやってみますと即答したものの、実験に費やす時間のなさ

に、非常に苦しみられた。相手が細胞なのでデリケートな実験でデータが安定しない上、ゆっくり考えてトライする時間もなかった。先生の強力なサポートがすべてだったと思う。自分はまだあきらめずにやり続けただけであつた。

実験の内容を書き始めてしまうと、理解しづらく、長くなるので割愛するが、塩基配列の異なるプラスミドを数サンプル用意し、エストロゲンに対する活性を調べるのが、大きな実験の中の自分の担当した分野であつた。プラスミドの入った細胞は牛や馬と同じで生き物である。なのでその培養も行わなければいけない。別に強制されているわけでもないのに楽しいものであるが、根気が必要だつた。雨が降っていても寒くても学校へ来て細胞の継代を行わなくてはいけない。ここまでくると意地である。

実際に発表して感じたことはアメリカ人のパワフルさと英語の重要性、そして学問への好奇心である。英語はとりあえず、どんなに速くても分かるようになることが必要だと思つた。自分が言うことは多少乱れてようが、理解してもらえらると思うが、ネイティブの速さについていけるかどうか勝負になる。そこが分からないのはつらいし、コミュニケーションがとれない。でも学問に対する姿勢はすごいと思つた。熱心に、集中して他人の話を聞き、よく質問をする。日本人がどうのこうのと言う気はないが、そういう姿勢と高い目標をもって学習することは重要だ。学校はもっとそういうことに直面する機会を増やすことを体験者として希望したい。

良い体験をしてもらえました

去る9月26日から29日まで、日本学術振興会(学振)と米国国立科学財団の日米科学協力事業として、ハワイ大学イーストウエストセンターで開催されたシンポジウム「脳の発達および可塑性とステロイドホルモン作用」に、医学部4年の遠藤由樹君と共に参加してきました。この企画は、両国の小人数の研究者が、親密な会合を持ってアイデアを交換する目的で、1972年に東京に集まった(Science 181:289, 1973)のを初めに、数年毎に開かれています。今回は横浜市立大学林しん治教授とコロラド大学Roger Engle教授を主な幹事としてお世話いただき、新たに若い世代を招く企画を提案したところ、幸い賛同を得て、本学からは自主学習プログラムで木山裕子講師のもとで、エストロゲン受容体の発現制御を熱心に実験している遠藤君を招くことが出来ました。体験談は遠藤君に任せますが、ポスターは大変好評で、英語での討論も日米の研究者から高い評価を得ました。学生諸君の教育委員会での海外で体験を得たいとの声に添えて、今後もこのような機会を設けたいと思います。現在我々は、学振の日米科学協力「脳研究」分野でロックフェラー大学と共同研究を進めており、学生諸君に同行、参加してもらおう方途があります。今年もノーベル賞取得者が出た大学院大学を見学したいと思いませんか。最後に遠藤君の渡航を可能にするため、講義・試験日程などにご配慮頂いた先生方に感謝します。

生理学第一 教授 佐久間康夫